

大介護時代を生きる

～長生きをころから喜べる社会へ

樋口恵子さん（中央法規） 1,680円（税込）

人生50年時代から80年時代、そして現在では「人生100年社会」とも呼べる超高齢化少子社会の道を走り続ける日本において、介護は今や新しい段階に突入している。

本書は、変貌し重厚長大化しつづける介護の現状について考察するとともに、北欧での終末期ケアの実践や、国内外の地域での取り組み事例などを通じて、大介護時代のケアのあり方を提案する。

はじめに——大介護時代は「ながら」介護で

第1章 “福祉の国”“重税の国”を訪れて

第2章 大介護時代のケアは総力戦

第3章 大介護時代の到来

第4章 家族が変われば介護も変わる

第5章 聞こえてくる希望のささやき

おわりに——たいへんですが初代の自負を

大介護時代は、介護を人々と分かち合い、家族は介護に一定のエネルギーを注ぐとしても、自分自身の仕事と志と人間関係を失わないよう「ながら」介護でいこう、と言える生き方をこの世に定着させたいと思う。定年後にそれぞれがもつ夢を、介護のためにすべて諦めなくてすむように。職場に託した希望と訣別しなくてもすむように。

配偶者・子との家族を崩壊させなくてすむように。それには地域だけでなく企業はじめ多くの協力が必須である。

そして、ケアを通して、また新しい出会いがある。老いという弱さを認め合いながら、支え合う方法を、人々をつなぐ方法を考え、見つけることができれば、老いがもつ脆弱性は、社会全体のしなやかな強靱性に転換可能ではないか。そんな希望のささやきを、今の社会の動きの中から、できるだけ聞き取ろうとして書き上げた。その声が本書を通して読者の皆様にも聞こえてくれば幸いである。

